

令和 5 年 5 月 18 日現在

機関番号：32604

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K12996

研究課題名（和文）ドイツ・ゴシックにおける王権表象の変遷 建築・彫刻・版画

研究課題名（英文）The Evolution of Royal Representation in German Gothic - Architecture, Sculpture, and Print

研究代表者

岩谷 秋美 (Iwaya, Akimi)

大妻女子大学・比較文化学部・准教授

研究者番号：10735541

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ドイツ・オーストリアにおいて14～15世紀に開花したゴシック芸術を、神聖ローマ帝国皇帝などの王権の観点から考察するものである。本研究では、聖堂建築を中心に、付属彫刻やステンドグラスなどの絵画を含めて総合的に検討し、王権表象の伝統的な側面と革新的な側面を指摘した。あわせて、ゴシック発祥の地であるフランスからの影響とその改変の経緯を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

フランスで12世紀に誕生したゴシックは、やがてドイツへも広まった。しかしドイツ・ゴシックはフランスのそれとは異なり、古い時代の特徴が色濃く残り続け、また形式や装飾形態も多彩であったため、これまで低評価に甘んじてきた。こうした状況に対して本研究は、王権表象を切り口としてドイツ・ゴシックの展開を考察し、その多様化する過程を明らかにすることで、ドイツ・ゴシックの再評価を試みた。

研究成果の概要（英文）：This research study focused on the Gothic art that flourished in Germany and Austria during the 14th and 15th centuries sanctioned by royal authority, such as the Holy Roman Emperor. Church architecture was at the core of this study, and the sculptures, stained glass windows, and so on, were comprehensively examined and analyzed. This study highlighted the traditional and innovative aspects of the representation of royal authority. Further, the process of modifying the influences from France, the birthplace of Gothic architecture in the European Middle Ages, was revealed.

研究分野：美術史

キーワード：ゴシック ゴシック大聖堂

1. 研究開始当初の背景

ゴシック建築は12世紀のイル・ド・フランスで誕生し、すぐさまフランス国内へ、そしてヨーロッパ各地へと広まった。ドイツでもやや遅れてゴシックが受容され、主に13世紀から16世紀にかけてゴシック的な特色が観察されるようになったが、しかしまた同時に、装飾や形式、建築図像などにおいて、ロマネスクなど前時代の特徴も色濃く残り続けていた。そのためドイツのゴシックには統一感がなく、普遍性の認められない多彩さが欠点と見なされ、あるいはフランスの亜流と評価された。こうした状況に対して現在のドイツ・ゴシック研究は、たとえばネット・ヴォールトなどの形態や装飾の多様性、そして独創性をドイツ・ゴシックの特色と位置付けることで、再評価を試みる段階にある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ドイツ・ゴシックの中でもとりわけ建築に注目し、これが多様化するに至るまでの展開と、その特質を明らかにすることである。研究に際しては、多様性をもたらした原動力として、ハプスブルク家君主をはじめとする神聖ローマ帝国皇帝などによるパトロネージを想定することで、その関与によりドイツ・ゴシックが発展した可能性も探る。

先述のとおり先行研究において多様性を評価する試みはすでになされておられ、中でも多彩な建築装飾の形態がこれまで注目を集めてきた。これに対して本研究は、着眼点を形態から、それをもたらした動機に転じることで、王権表象を基軸としてドイツ・ゴシックを捉えなおすものである。

3. 研究の方法

本研究の主な方法は、以下の3点である。第一に、ゴシックとそれ以前の時代、すなわちカロリング朝美術やロマネスク美術などの比較である。これにより、ドイツにおける伝統がゴシックへ受け継がれた状況を明らかにする。第二に、ゴシックの発祥地であるフランスとの比較である。これにより、ドイツ・ゴシックがフランス・ゴシックをどのように受容したのかについて、その目的とともに明らかにする。第三に、建築を中心に、そこに付属する彫刻や絵画などを総合的に展望する。時代や地域ごとに異なる建築と彫刻ないし絵画の関係性の比較を通じて、ドイツ・ゴシックの特質がいっそう明らかになることが期待される。

4. 研究成果

(1) 建築図像の継承と改変

ドイツ・ゴシックが多様化する過程を、14世紀中葉におけるウィーンのザンクト・シュテファン聖堂の造営を例として示したい。ハプスブルク家のルードルフ四世(1339-1365)は、本聖堂を造営する際、ロマネスク期ドイツの皇帝大聖堂(Kaiserdome)を手本にして、ドイツに伝統的な建築図像を導入した。皇帝大聖堂とは、ライン流域に建設されたロマネスク期の皇帝霊廟を指す概念である[1]。皇帝大聖堂を実現させるための取り組みとして、次の三点が挙げられる。

第一に、13世紀に建設された後期ロマネスクの西構え(Westwerk)の保持である[2]。西構えとは、聖堂の西側に設けられた、建築物としても典礼の上でも独立した構造物のことである[3]。本聖堂の場合、オットー朝期に建設されたパッサウ大聖堂を手本にしたものと推察されている[4]。この西構えを、取り壊して新しいスタイルで再建するのではなく、古いまま保持した点が重要である。なおルードルフ四世が創設した諸聖人参事会が置かれたのも、この西構えであった。

第二に、複数の塔を備える点である。多塔もロマネスク期における皇帝大聖堂を特徴付ける要素である[5]。しかし実際の塔は、少なくとも最初に建設された下層部分は、ロマネスクのそれではなく、皇帝カール四世によるプラハ大聖堂に由来するパルラー・ゴシックのスタイル[6]であり、さらに上層部分は細かいトレーサリーが並ぶ繊細な造形と化したため、この南塔は柔軟様式(ドイツの国際ゴシック)に位置付けられた。このように、ドイツの伝統的な建築図像が、ドイツ・ゴシックのスタイルへと変更されたのである。

皇帝大聖堂としての第三の要素は、二重礼拝堂(Doppelkapelle)である。これをドイツ・ロマネスクのタイプではなく、フランスのサント＝シャペルのタイプへと置き換えた上で導入したのである。二重礼拝堂については次節で詳述するが、ルードルフ四世はこの伝統的な形式を改

変して受容し、ハプスブルク家一族のステンドグラスや彫刻などで飾ることにより、君主権の継承を主張した。

以上のようにルードルフ四世は、同時代の、あるいは歴史上の権威ある君主から、建築の形式や象徴性、スタイルを貪欲に取り込み、自身の権力を象徴する聖堂の建設を目指していたのである。

(2) ドイツとフランスの王権表象

ドイツ・ゴシックの君主へ影響を与えたフランス・ゴシックの作品の一例として、パリのサント＝シャペルに注目する。パリのサント＝シャペルは、ルイ九世（1214-1270）が建設した宮廷礼拝堂である。ステンドグラスに囲まれた光り輝く空間効果が特徴であり、13世紀のレイヨナン・ゴシックの代表作に位置付けられる。後にルイ九世が列聖されたこともあり、サント＝シャペルはドイツへも影響を与えた。本研究ではとりわけ建築図像の側面に着目し考察した結果、本礼拝堂がカロリング朝のアーヘン宮廷礼拝堂に由来するドイツの伝統を改変しながら継承しているとの結論に至った。こうした親和性があったからこそ、ドイツ・ゴシックに強い影響を与えたと考えられる。

アーヘン宮廷礼拝堂をはじめとするドイツの礼拝堂とサント＝シャペルの形式を比較すると、ほとんど類似点は見当たらないが、唯一、二重礼拝堂という建築形式に共通点を見出すことができる。ただし、確かに両者ともに二階建てであるものの、しかし建築タイプが異なるため、コーエンは両者の関係性を否定した[7]。ビンディングとケプフの定義によると、二重礼拝堂は、それぞれの祭壇が置かれ独立した空間を、上下階に重ねた建造物を指すが、上下階の接続方法は二種類あり、ひとつは中央に開口部を設けるタイプ、もうひとつは開口部をもたず上下階に連続するタイプである[8]。アーヘン宮廷礼拝堂をはじめとするドイツの礼拝堂には前者が多く、一方でサント＝シャペルをはじめとするフランスの礼拝堂は後者が多い。

アーヘン宮廷礼拝堂と比べてサント＝シャペルは、集中式ではなく長堂式を、モザイクではなくステンドグラスを採用することで、光の溢れる象徴的な空間を創出した。あわせて、聖遺物である荊冠を核として、王権に主眼を置いたステンドグラス[9]の図像や彫刻を配置することで、王冠すなわち王権のイメージをさまざまに繰り返すなど、表象の方法を飛躍させたと言える。

以上により、カロリング朝以来の宮廷礼拝堂が有していた王権表象の機能は、その形や手法を変えてサント＝シャペルに継承されたと結論付けられる。総じてサント＝シャペルはゴシックの新しい礼拝堂であり、建築タイプや空間効果を大きく変更している。しかし象徴性や空間的特質を改変し、機能を分化することで、伝統的な二重礼拝堂の特質を受容した。そしてその象徴性や機能が、さらにドイツ・ゴシックにより継承されたのである。

(3) フランスに由来する図像プログラムの改変

フランス・ゴシックからの影響とそのドイツ的な改変は、聖堂付属彫刻にも観察される。その一例が、ニュルンベルクの聖母聖堂である。本聖堂は、皇帝カール四世（1316-1378）の時代に造営されたものである。聖堂西正面は、ドイツ中世聖堂に伝統的な西構えのごとき半ば独立した建造物となっており、その上階は権標の展示空間とされ、さらには西正面中央に驚の紋章が掲げられていることから、本聖堂と皇帝との関係の強さを伺い知ることができる。

考察では西の扉口[10]に注目し、建築構造によって形成される枠組みに従属している、あるいは枠組みを超越している、聖母マリア図像の表現を検討した。王権表象においてとりわけ注目されるのは、玄関廊の〈聖母戴冠〉である。このプログラムは、ランス聖母大聖堂西正面で聖母マリア図像の表現舞台を破風へと拡張させた手法を、さらに発展させ、ヴォールトを利用して三次元的に再編成させたものと筆者は考える。そもそもランス大聖堂を飾る一部の彫刻は、ニュルンベルクを管轄するバンベルク司教座大聖堂の彫刻と様式上の関係性が指摘されている[11]。さらにランス大聖堂はフランス国王の戴冠聖堂であることから、カール四世の意向などにより、本大聖堂が聖母聖堂扉口の手本となった可能性は高い。〈聖母戴冠〉を中心とするヴォールトのリブ上には、起点の預言者にはじまり、楽器を奏で、あるいは香炉で祝祭する天使たちが連なり、天上世界を創出する。この天使たちは、多くの作例にて戴冠図の両脇でタンバンの両端を埋めるように配されてきたわけだが、いまや広くヴォールト中を飛び交っている。その頂点は、天上世界の中心として、そして玄関廊空間の頂点として、〈聖母戴冠〉を描写すべき最適の場所である。また、この玄関廊の上階にあるザンクト・ミハエル内陣は戴冠式に用いる権標の保管場所であり、したがって〈聖母戴冠〉は、上階空間の機能と象徴性を示すことにもなるのである。

註

1) Dethard von Winterfeld: *Die Kaiserdome Speyer, Mainz, Worms und ihr romanisches Umland*, Würzburg 1993, S. 14-15.

2) 本聖堂における西構えの特殊性については、以下が詳しい。Richard Kurt Donin: *Der Wiener Stephansdom und seine Geschichte*, Wien 1946, S. 68.

3) Günther Binding / Hans Koepf: *Bildwörterbuch der Architektur*, 2005 (4. überarb. Aufl.).

4) Arthur Saliger: Zur architektonischen Ikonologie der Dome von Speyer und Wien, in: *Mitteilungen des Historischen Vereins der Pfalz*, LXXXVIII, 1990, S. 61-67, hier S. 62.

- 5) 本聖堂における皇帝大聖堂としての位置付けについては、以下が詳しい。Saliger 1990, *op. cit.*, S. 65; Saliger 2005, *op. cit.*, S. 23.
- 6) Marlene Zykan: Zur Baugeschichte des Hochturmes von St. Stephan, in: *Wiener Jahrbuch für Kunstgeschichte*, XXIII, 1970, S. 28-65.
- 7) Meredith Cohen: *The Sainte-Chapelle and the Construction of Sacral Monarchy. Royal Architecture in Thirteenth-Century Paris*, New York 2015, pp. 118-120.
- 8) Günther Binding / Hans Koepf: *Bildwörterbuch der Architektur*, 2005 (4. überarb. Aufl.).
- 9) Louis Grodecki: *Sainte-Chapelle*, Paris 1961 (Deutsche Ausgabe); Otto von Simson: *Opere superante materiam. Zur Bedeutung der Sainte Chapelle zu Paris*, in: *Von der Macht des Bildes im Mittelalter. Gesammelte Aufsätze zur Kunst des Mittelalters*, Berlin 1993, S. 133-145.
- 10) 19 世紀に大規模な修復が行われた。この修復に関しては、以下が詳しい。Ursula Schädler-Saub / Peter Turek: Die Vorhalle der Nürnberger Frauenkirche. Eine neugotische Restaurierung unter August von Essenwein 1879-81 und ihre Rezeption im 20. Jahrhundert mit einem Arbeitsbericht zur Restaurierung 1988-1992 von Peter Turek sowie einer Zusammenstellung der wichtigsten Daten und Quellen zur Bau- und Restaurierungsgeschichte, in: *Jahrbuch der bayerischen Denkmalpflege*, XLV/XLVI, 1991/92, S. 166-187.
- 11) Willibald Sauerländer: Reims und Bamberg. Zu Art und Umfang der Übernahmen, in: *Zeitschrift für Kunstgeschichte*, XXXIX, 1976, S. 167-192.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 岩谷秋美	4. 巻 24
2. 論文標題 宮廷礼拝堂としてのパリのサント=シャペル アーヘン宮廷礼拝堂が担う王権表象との比較	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大妻比較文化	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 岩谷秋美	4. 巻 20
2. 論文標題 《エヒテルナハの典礼書および交誦聖歌集》（Darmstadt, ULB, Hs. 1946）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Aspects of Problems in Western Art History	6. 最初と最後の頁 88-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 岩谷秋美	4. 巻 19
2. 論文標題 《ラインの画帖》（Wien, OeNB, Cod. Vind. 507）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Aspects of Problems in Western Art History	6. 最初と最後の頁 83-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 岩谷秋美	4. 巻 23
2. 論文標題 ニュルンベルクの聖母聖堂におけるゴシックの扉口彫刻：聖母マリア画像の再編成	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大妻比較文化	6. 最初と最後の頁 19-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岩谷秋美	4. 巻 38
2. 論文標題 ハプスブルク史の中のゴシック大聖堂 権威表象の遍歴とゴシックの終焉	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語文化	6. 最初と最後の頁 7-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩谷秋美	4. 巻 55
2. 論文標題 皇帝フリードリヒ三世墓碑のリアリズム ゴシック末期における墓碑彫刻の形式と表現	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京藝術大学美術学部紀要	6. 最初と最後の頁 27-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩谷秋美	4. 巻 18
2. 論文標題 《ピーティ・ロサリウム》(Dublin, Chester Beatty Library, MS. W. 99)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Aspects of Problems in Western Art History	6. 最初と最後の頁 87-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩谷秋美	4. 巻 17
2. 論文標題 《マリ・ド・ブルゴーニュの時祷書》(Wien, OeNB, Cod. Vind. 1857)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Aspects of Problems in Western Art History	6. 最初と最後の頁 130-134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岩谷秋美
2. 発表標題 ハプスブルク史の中のゴシック大聖堂 権威表象の遍歴とゴシックの終焉
3. 学会等名 歴史の中の美術 大原まゆみ先生の最終講義に代えての小講演集
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------